

宿命な異母兄弟の関係

二〇〇四年は、日本にとつての中国の存在がひときわ目立った年であった。最近の中国は、日本にとつて必ずしも好ましい存在ではないことがはっきりした、と言ったら過言であらうか。

中国にとつても、日本は好ましい存在ではないかもしれないが、アジアの大国として両者は並存せざるを得ない宿命にあるのだから、日中関係には常に十分な意を用いていかないと大変なことになるかねない。

浮つついた日中友好ムードとは異なるこの事実が、ようやくにして広く認識されはじめたのだとしたら、二〇〇四年に日中間で生じた多くの出来事は、貴重な教訓である。

いずれにせよ、日中関係は宿命的な「異母兄弟」のような関係なのであるから、「友好」は表面的で、「対立」が基調であることをまず弁えなければならぬ。

最近の日中関係は日中首脳相互訪問がなかなか行われないなど、政治的にはぎくし

やくして冷え切っているが、経済的には日中貿易も日本の対中国投資も伸びている。日本企業も中国の経済発展に助けられているのだから、「政冷経熱」なのだというけれど、経済関係は本来、利益に

基づいて動くものなので、いつ変化するかは定かでない。だとすれば、日中関係は、その歴史的位相からして、常に冷めた関係でないといけないはずである。

裏に心理的な劣等意識も

しかも、最近の中国がいかん急速に経済発展を遂げつつあるといつても、いわば国中が工事現場のようなありさまのゆがんだ乱開発なので、日本のような社会的成熟にはほど遠い。一人当たりの国内総生産(GDP)は、日本の三十分の一以下、世界経済に占めるGDP比率は、日本が約15%なのに、中国はようやく4%台に乗りはじめたところである。

安易な妥協は日中関係に逆効果

正論



国際教養大学学長 中嶋 嶺雄

この著しい日中間の経済的・社会的格差こそ、中国側が常に日本にさまざまな要求を突き付けたり、注文を発したりする根源であり、原点であることを知らねばならない。つまり、社会的な成熟や経

そうではなくて、まさに中国の社会主義がうまくゆかず、日本の資本主義が成功したからに他ならない。このような日中関係の基本を冷静に考えれば、二〇〇四年に発生したサッカー・アジ

济的格差という点で中国は、大きな心理的コンプレックスを抱いているのであり、日本への厳しい請求は、そのような劣等意識の裏返しだともいえるのである。 どうしてこんなに大きな開きか、日本と中国との間に生じてしまったのであろうか。日本の戦前の「中国侵略」のためであらうか。否である。

アカップでの「反日」ブーイングや一連の対日領海侵犯、潜水艦潜入事件、そして「靖国」問題や台湾の李登輝前総統来日に関する内政干渉については、日本側にいささかも非がないのであるから、外交姿勢としては姑息な妥協や戦術を弄することなく、断固として堂々と対応しなければならぬ。

歴史が教える対中国外交の鉄則

にかかわる問題で、中国に妥協したり譲歩することは、永い日中関係の「歴史の教訓」に照らしても、あつてはならないことである。 中国は「靖国」を対日外交カードに使っているのであつて、中国国内で「靖国」が大問題になっているわけでは決してない。

現に、チリのサンティアゴで行われた小泉・胡錦濤会談を報じた『人民日報』(二〇〇四年十一月二十三日)は、一面の右下に縦三段記事を載せているに過ぎないが、「靖国」問題は主見出しにも小見出しにもなっていないのである。 それがどうだろう。日本の新聞は、いかにも「靖国」問題が会談のすべてであったかのように報じていたのである。 当面、日中関係や日中首脳会談という、すぐ「靖国」だと大騒ぎする日本のマスメディアの報道姿勢も問われるべきであり、この点では、襟を正すべきはむしろ日本側なのかもしれない。(なかじま みねお)